

# 育ってきた環境が子どもたちに与える影響について

200775 太田美幸

- 1 はじめに
- 2 子どもの貧困の現状
- 3 子どもの貧困がもたらすもの
- 4 子どもの貧困に対する取り組み
- 5 おわりに

## 1 はじめに

「育ってきた環境」と一言で言っても、家族や交友関係、はたまた育ってきた地域など様々ある。なかでも家庭における経済面に焦点をあてた理由は、私が住んでいる地域では6人に1人が貧困だと言われ、中学校のクラスメイトの母親が子ども食堂を運営するほど子どもの貧困が身近な問題であったからである。家族というものは1番長い時間を共に過ごすこともあり、子どもの人格形成などに強い影響を与えると考える。特に家庭の経済事情は子どもが大人になるまでついて回るものであり、子ども本人の力ではどうしようもないものでもある。しかし、昨今の日本では子どもたちの間で相対的貧困が広まり、改善策も特に見出されていない実態がある。子どもの貧困について手立てを打つことは、子どもたちの健全教育に繋がることはもちろん、少子高齢化に対する歯止めにもなるはずであ

り、国を挙げて真剣に取り組むべき課題であると考えている。

## 2 子どもの貧困の現状

### (1) 子育てにかかる費用

子どもの貧困について考えるうえで、私が両輪として捉えている2つの視点がある。ひとつは、子育てにお金がかかる点。もうひとつは親自身が持つ経済力である。

子育てにお金がかかるという点で、挙げたい4つの事柄がある。①国際競争に伴う教育の高度化、②少子化に伴う高等教育の入学者の減少、③学童保育の不足による塾や習い事といった放課後の過ごし方、④すでにある支援策の認知度の低さである。特に①と②は一人当たりの負担額が増加するという切り離せない事情があると考えている。また、幼稚園から高校まですべて私立に通った場合、学習費総額の平均は1830万円であり、公立に通った場合の3倍以上になる<sup>1</sup>。③については、待機児童の解消に向けて行政が動いてきたこともあり改善の傾向も見られるものの、女性の就業率の向上により需要も大幅に増加している。また、放課後児童クラブのさらなる拡充も重要視される。④の支援策については、共働きなどで忙しい両親が自ら補助金の制度などを調べて役所などに赴くことは大変な労力である。例えば自治体の方で公式のアプリやSNSのアカウントなどを開設し、そこでその地域で受けられる支援を紹介するなどの策を考える必要がある。

---

<sup>1</sup> 令和4年度版「少子化社会対策白書『子どもの学習費調査(2018年度)』」

## (2)親自身の経済力

次に、親自身の経済力について考える。子どもたちの貧困というのは相対的貧困であって、衣食住に事欠く絶対的貧困とは少し異なる。そのため表面化しにくく、第三者から気づきにくいこと、さらに本人も気づくことができないことがある。また、貧困は連鎖すると言われている。これは親が貧困状態であることで直接的に子どもも貧困になるということである。また、7人に1人が相対的貧困と言われているが、ひとり親家庭だけで見ると50.8%と約半数が相対的貧困である。とくに母子家庭の多くはワーキングプアであるとされ、深刻である。実際に令和2年度では、ひとり親家庭の平均収入は母子家庭で272万円、父子家庭では518万円と言われている<sup>2</sup>。貧困の連鎖はどこかで断ち切る必要があるが、自分たちの力でこれをなすことは非常に難しい。

## 3 子どもの貧困がもたらすもの

### (1) 子供の貧困がもたらす経済損失

子どもの貧困を放置した場合、日本財団の試算では42.9兆円もの経済損失を生むと言われている。1学年あたりにすると2.9兆円規模の数字である。これは、家庭の経済事情で学習の機会が失われると大学の進学が困難になり、それは就職にまで影響を与える。実際

---

<sup>2</sup> 令和3年度全国ひとり親世帯等調査結果報告（厚生労働省）

に、全世帯の大学等への進学率は73.0%とされているが、ひとり親世帯では58.5%である

<sup>3</sup>。現代の日本は、最終学歴によって給与に差が生じることが多く、大学への進学をあきらめることで低収入の職にしか付けなくなる場合も少なくない。その結果、税金や社会保障の支払に支障が出てくる。

## (2) 子どもたちの孤立

また、子どもの貧困は子どもたち自身の孤立も招くと考える。これは、ひとり親家庭に限った話ではなく、両親が共働きの家庭でも起こりうる問題である。家族とのコミュニケーションが不足すると経済的だけでなく精神的貧困にも繋がると言われている。親自身も収入の少なさなど経済的なストレスを抱えていることで、夫婦喧嘩が多かったり虐待という形で子どもにあたってしまうたりする。また、虐待は避けられたとしても、仕事が忙しいあまり時間的余裕がなくて子どもとのかかわりが浅くなったり、子どもに対して放任主義であったりと、子どもたちの健全教育が難しいケースが考えられる。

くわえて、現代の日本は格差社会と言われおり、恵まれた環境で育つ子どもも一定数存在する。そういった子どもたちは、幼少期からスマホが与えられ、塾をはじめ習い事をする。結果的に、そこは家・学校以外に自分が所属できるコミュニティになるし、放課後の居場所でもあり、他者との交流の場にもなる。一方、家庭が貧困状況である子どもたちはそういった第三の居場所が得られないことはもちろん、結果として家にも居場所がなく、

---

<sup>3</sup> 令和4年度版「子ども・若者白書『所得・世帯と進学率』」

学校にもなじめず、人によっては不登校になってしまうこともある。したがって、放課後の過ごし方というのは、現代の子どもたちにおいて大変重要な役割を持つと考える。

#### 4 子どもの貧困に対する取り組み

##### (1) 子ども食堂

子どもの貧困に対する取り組みとして、子ども食堂があげられる。無料、または低価格(100円～300円ほど)でご飯を提供する子ども食堂であるが、学生ボランティアを集めて勉強や遊びの場を併せて提供しているところも少なくない。地域住民や自治体はもちろんだが、NPOやボランティアをはじめとする民間主体で開催されることが多いため、正確な数値は分からないが全国6000か所に存在すると言われている。

子ども食堂が持つ課題としては、資金面と本当に支援が必要な子どもたちにどのようにしてサービスを届けるかの2点があげられる。子ども食堂の維持・運営には人手と資金が欠かせない。行政による支援金や、民間からの寄付金などで子ども食堂は成り立っているところが多く、運営はギリギリの状況である。また、周りの目を気にして行くことができない子どもや、そういった場所があることを知らない子どもたちにどのようにして足を運んでもらうかも課題である。子ども食堂と聞くと、どうしても「恵まれない子どもたちが行くところ」というイメージがあるせいか、行きたくても行きづらいという子どもたちも少なくない。支援を必要とする子どもたちに来てもらえるよう、子ども食堂に対するイメージをプラスの方向に変えていくことが求められる。

## (2) 学校を中心とした支援体制

学校側の取り組みとして、放課後教室の拡充と専門家による相談体制があげられる。貧困による学力差を減らすため、塾などに通えない子どもたちを対象に、放課後の学校で予備授業を行うことを提案する。講師に定年退職後の先生や学生ボランティアを募れば、現役の教師たちの負担も少なく済むはずであるし、日中とは違う人と接することで子どもたちにも勉強以外で得られるものがあったり、相談できることがあったりすると考える。

また、スクールカウンセラーやソーシャルワーカーを学校に配置し、身近に相談できるところを作り出すことが重要である。専門家を学区ごとに配置して、決まった曜日にだけ学校に行ってもらっただけでも今より効果があると思われる。特に、相対的貧困は表面化しにくいいため、多忙な業務に追われがちな教師たちは気づいてあげられないこともある。専門家たちが介入していくことで子どもたちの異変や SOS を汲み取ってあげる必要がある。他にも、受けられる公的支援などの情報提供を学校という身近な場所で行うことができれば、もっと支援の幅は広がるし、適切な支援が受けられる人たちも増えていくと考える。

## 5 おわりに

子どもの貧困に対する取り組みを2つほど検討したが、これらは根本的な解決に結びつくものではない。連鎖する子どもの貧困を止めるには国をはじめ行政が中心となって腰を据えて取り組む必要がある。次世代へ貧困を持ち込まないためには、まずは子育て世代や働き盛りの世代への賃上げが求められると考える。子育てというものは一時的な給付金で

凌げるものではなく、長期的に続いていくものであり、支援も同様に切れ目なく長期的に行っていくことが重要である。限られた予算の中で支援を続けることはもちろん難しいことではあるが、少子高齢化が深刻化する日本において子育てを支援し、子どもを産み育てやすい社会にすることは、子どもの貧困対策にとどまらず、少子化の抑止にもつながるはずだ。

また、子どもの貧困だけを見て考えるとその家庭だけの問題のように捉えてしまうかもしれないが、子どもの貧困は日本社会に経済的な悪影響を与えているだけでなく、巡り巡って様々な危険を生み出している。子どもたちの貧困は私たちが思っている以上に犯罪に結びつきやすいのである。経済的な貧困を解決することは一朝一夕の取り組みでは難しいかもしれないが、子どもたちが加害者にも被害者にもならないよう、精神的な貧困だけでも可及的速やかに解決しなければならない。そのためには子どもたちの心の支えとなるような居場所を我々大人が作る必要があると考える。